

共同研究グループ活動報告（2012 年度）

日中関係史

12 年度の活動は、1. 個別の講演会やワークショップと、2. 従来から開いている日中双方の留学の歴史の研究会を実施した。

1.

- ・ 5 月 10 日（木）、陳祖恩氏（上海・東華大学教授）講演「上海に生きた日本人」
- ・ 6 月 13 日（水）、楊中美氏（本学非常勤講師）講演「中国が直面している内憂外患」
- ・ 11 月 16 日（金）、人文学会・緋文字資料研究センター共催のワークショップ
「カメラが開く記憶の扉—中国ドキュメンタリー映画の試み」
発言者：呉文光氏、鄒雪平氏、章夢奇氏（3 氏ともドキュメンタリー映画監督）
通訳・解説：秋山珠子氏（本学非常勤講師）

2.

- ・ 6 月 30 日（土）、「日華学報・日華学会について」報告：大里浩秋、孫安石、見城悌治氏（千葉大学准教授）
- ・ 9 月 29 日（土）、宗村高満氏（大正大学研究員）「戦前の大正大学の中国人留学生」
田遠氏（神奈川大学博士課程）「戦後の中国人留学生について—『星火』を中心に」
- ・ 11 月 23 日（金）、劉峰氏（千葉大学博士課程）「中国における留日経験者のアジア主義」
胡穎氏（大正大学博士課程）「清末の留日学生の経費について」
- ・ 1 月 18 日（金）、書評報告会、東京大学駒場
卞鳳奎著『日治時期台湾留日日本医師之探討』（見城悌治氏）
鮮明著『清末中国人使用的日語教材』（孫安石）
李喜所著『近代留学生与中外文化』（大里浩秋）
藤田佳久著『東亜同文書院生が記録した近代中国の地域像』（大里浩秋）
小谷一郎著『1930 年代後期中国人日本留学生

文学芸術活動史』（周一川）

白土悟著『現代中国の留学改革』（王雪萍）

13 年度は、2 の活動を継続しつつ、1 の幅広いテーマに関する講演会、研究会を開きたいと考えている。

（文責 大里浩秋）

東アジア比較文化研究会

◆本年度のテーマ

前年度の活動は、研修帰りの山口先生に帰朝報告をお願いしたのみで、ほとんど休眠状態で推移しました。これに危機感を覚えた山口先生の呼びかけで、5 月某日、六角橋の某所に山口・小馬・上原・深澤の 4 人が集まり、談合を重ねました。その結果、「聖なるトポス」で行こうということになりました。「ぶらタモリ」や「ちい散歩」がもてはやされる昨今の風潮に、棹さそうというわけです。「ゲニウスロキー」でも、「パワースポット」でも、「風土」でも、「ランドマーク」でもいいのですが、ともあれそれぞれの研究領域で、ひたすら「地べた」にこだわつつ、意見交換する場をもうけようということとなりました。

◆第 1 回研究会

7 月 24 日（火）16:30 ～

発題者：上原雅文「神に関わる聖地の景観構造」

本年度第 1 回目の研究会を行いました。メンバーの上原先生に「神に関わる聖地の景観構造」と題して報告していただきました。2006 年に科研費補助（『日本における神仏関係思想をめぐる倫理学的基礎研究—神・仏概念の原理的解明』）を受けてなされた成果の紹介でしたが、前半は現象学を中心とした景観（空間）と物語（時間）に関する、哲学的基礎付け作業がなされ、後半は地形図等を用いた具体的景観事例についての紹介がなされました。参加者は 4 名と少なかったのですが、識字社会以前と以後について、他界の文化的機能について、和語と漢語についてなど、活発な

意見交換がなされました。

◆第2回研究会

11月21日(水) 17:00～

発題者：深澤徹「夏目漱石『虞美人草』に見る、馬琴の〈影〉」

2回目の研究会が行われ、無事終了しました。固有名詞についてのソール・クリプキの論を踏まえつつ、地名や人名の固有性を通して、夏目漱石の小説『虞美人草』における固有名の扱いを論じてもらいました。参加者は発表者も含めて5名と少なかったのですが、活発な意見交換がなされ、そのあとさらに居酒屋「世界長」で楽しく有意義なコミュニケーションの場が持たれました。

◆第3回研究会

日時：2月27日(水) 16:00

発題者：鈴木陽一「中国江南の水神と英雄神の信仰」

(文責 深澤 徹)

色彩と文化Ⅲ

・活動報告(計画)

新たに田島佳也氏(本学経済学部経済学科)および山本俊雄氏(本学工学部建築学科)をメンバーに迎えた。田島氏は日本経済史、流通史、漁業史が専門であり、一方山本氏は建築物の基礎構造が専門である。

それぞれ専門が異なる田島、山本および三星で、3月12～15日、中国福建省福州市において、中国福建と日本との文化的(建築、色彩を含む)、経済的つながりに関する調査研究を計画している。

福州市はかつて琉球王国の明・清との朝貢貿易の拠点となった場所であり、その地において両国間のつながりおよび九州を含む日本との文化的、経済的なつながりに関するデータ収集を行う。

(文責 三星宗雄)

「植民地近代性の国際比較——アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験——」

1. 研究の目的

本研究は、「植民地近代性」が現れている領域として、「帝国」、「植民地主義」、「ナショナリズム」、「国民国家」、「脱植民地化」、「エスニシティ」の6つの課題を取り上げ、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの諸地域を対象として、以下の6つを課題として共同研究を行う。そのうえで、「植民地近代性」の概念の新たな構築をめざすものである。

2. 研究グループ・メンバー構成：

永野善子(人間科学部)、小馬 徹(人間科学部)、後藤政子(外国語学部)、尹 健次(外国語学部)、村井寛志(外国語学部)、泉水英計(経営学部)、高城 玲(経営学部)、藤村是清(本学非常勤講師)、菅原 昭(本学非常勤講師)、岡田泰平(成蹊大学)、中林伸浩(桐蔭横浜大学)

3. 本年度の活動について

本年度は3年間の共同研究の成果を、以下のように一冊の叢書としてまとめることを課題とした。本書は「神奈川大学人文学研究所叢書31」として、2013年3月までに御茶の水書房から刊行の予定である。

表題：『植民地近代性の国際比較——アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験』

編著者：永野善子

構成：

第1章：親日であれ親米であれ我が郷土——植民地台湾で育った米軍政下琉球の沖縄行政官 泉水英計

第2章：脱植民地化の課題と左翼ナショナリズム——金斗鎔の場合 尹 健次

第3章：抵抗の歴史としての反米ナショナリズム——レナト・コンスタンティーノを読む 永野善子

第4章：植民地期タガログ語短編小説にみる教育と近代——農村・学歴・植民地都市 岡田泰平

第5章：非常事態時期マラヤにおける植民地的／

冷戦的近代化とその横領——スクウォッ
ター再定住事業と植民地政府、華人有力
者、地域住民 村井寛志

第6章：相互行為としての制度——タイ農村にお
ける研修と選挙の集まりの場から 高城
玲

第7章：タイ近代性としての小農的世界——タイ
東北部市場における米の価格形成の問題
を中心にして 菅原 昭

第8章：アフリカの植民地近代性——「宗教」の
侵入について 中林伸浩

第9章：スワヒリ語の発展と植民地近代性論——
その可能性と不可能性をめぐって 小馬
徹

第10章：ラテンアメリカにおける西欧中心主義
近代化思想の克服——ボリバル、マル
ティ、キューバ、ボリビア 後藤政子
(文責：永野善子)

プランゲ文庫研究会

今年度は共同研究奨励金助成「プランゲ文庫と
東アジア」としてシンポジウム、研究会などの活
動を行ってきましたので、詳細は「プランゲ文庫
と東アジア」活動報告書をご覧ください。

(文責 孫安石)

活字文化の研究

1. 講演会・研究会の開催：特になし（適宜、メ
ンバー間での情報共有を行った）
2. シンポジウムの開催：特になし
3. 活動内容

- (1) 活字を通じた日本語教育と異文化理解
（国際）に関する調査・研究
- (2) 活字文化普及のための教育・啓発活動
（教育）に関する調査・研究

(文責 松本安生)

モダリティ・プロジェクト研究会

1. 研究会開催

開催日：2013年1月30日（水）

会場：本学20号館417

発表者：片岡喜代子（本学外国語学部スペイン
語学科）

演題：「言語の普遍的原理と個別特質～日本語
とスペイン語の否定関連現象から～」

2. 活動内容

言語形式とモダリティの関係について、所属メ
ンバー各自が研究対象とする言語について成果を
発表し、対照研究への発展を目的としている。今
年度前半は、言語研究センターの研究叢書として
出版された報告書第2号の編集が主な活動となっ
た。報告書2巻にまとめたこれまでの成果を踏ま
え、意味と構造の対応に関わる機能範疇に焦点を
当てた研究を進めようとしている。

(文責 佐藤裕美)

〈身体〉とジェンダー

本年度は以下の日程で二回の研究会を開催した。
第1回研究会（2012年7月11日：人文研資料室）
第2回研究会（2012年10月10日：人文研資料室）
第3回研究会（2013年3月6日：人文研資料室）

- ・研究会の今後の方向性として、現代における社
会とジェンダーを共通に取り扱うことを確認
し、一つの可能性として〈68年〉のジェン
ダー表象が例として挙げられた。
- ・上記のテーマをもとに、3年をめどに叢書刊行
を目指すことが確認された。
- ・第1回研究会では熊谷謙介（外国語学部准教
授）がフランスを、また第2回研究会ではクリ
スチャン・ラットクリフ（外国語学部准教授）
が日本、小松原（外国語学部准教授）がドイツ
における〈68年〉とジェンダーに関わる年表
を作成し発表した。
- ・今後も研究会を重ねながら、各対象地域にお
ける年表作成などを基に、知識を共有しつつ、各
自の問題意識を深めていく予定である。

(文責 小松原由理)

「自然観の東西比較」研究グループ

1. 研究会の開催（予定）

2013年3月4日（月）

場所：人文学研究所資料室

発表者：小熊 誠 「風水に見る環境と政策
—近世琉球における村落移動を中心
に—」（テーマ未定）

：上原雅文 「日本古代の神観念と自然景
観の構造化」

2. シンポジウムの開催

予定なし

（文責 伊坂青司）

近代都市の表象

1. 講演会・研究会の開催

本年度第1回研究会 2013年3月を予定

発表者：熊谷謙介

2. シンポジウムの開催

予定なし

3. 活動内容

近代の東洋ならびに西洋の諸都市の来し方や現況について、表象という切り口から分析を試みている。

研究会等を積み重ねながら、数年後に人文学研究叢書を出版することを目標としている。

（文責 鳥越輝昭）

「越境する比較文化」

1. 研究会等の開催

現時点（1月下旬）で、本共同研究グループが開催した研究会・検討会等は次のようである：

① 今年度の国際シンポジウム・国際共同研究プロジェクトのワークショップ（下記2、①参照）に対する反省会、成果考慮会（6月下旬に2回）。

② 2013年度に人文学研究所叢書として出版される予定の論文集（『Modes of Adaptation: Perspectives from Comparative Literature and

Cultural Studies』）に関する計画検討会・編集準備会（10月中旬と11月上旬、2回）。

③ 次年度開催予定の国際シンポジウム・国際共同研究プロジェクトのワークショップ（下記2、②参照）に関する計画検討会・実行委員会（9月下旬、10月中旬・下旬、11月中旬、12月下旬の5回）。

また、②と③に類する会は来る2月、3月中にも数回開く予定である。

2. シンポジウムの開催

① 2012年6月16・17日に、第二回国際シンポジウム「比較文学の視点から見る改作」（Second International Symposium on Comparative Literature, “Reform, Reuse, Recycle: Comparative Literature Perspectives on Adaptation”）、並びに国際共同研究プロジェクトのワークショップを開催した。

（事業代表者：クリスチャン・ラットクリフ）

② 2013年6月15・16日に、第三回国際シンポジウム「変形、変容、越境—文化学研究における翻訳」（Third International Symposium on Comparative Culture, “Transform, Transfigure, Transcend: Translation in Cultural Studies”）、並びに国際共同研究プロジェクトのワークショップを開催する予定である。

（事業代表者：クリスチャン・ラットクリフ）

3. 活動内容

上記の国際シンポジウムと国際共同研究プロジェクト等を以って、国内・国外に向けて、比較文学・文化の方法論を用いた研究を発表・交流するための「場」として、神奈川大学や人文学研究所の知名度を上げ続けることが本共同研究グループの目的の一つであり、その目標に向かって今年度も活動してきた。また、2013年度に人文学研究所叢書として出版される予定の論文集（上記1、②参照）などによって、広い範囲において比較文学・文化の方法に関する意識を深めるという、本共同研究グループのもう一つの目的の達成に向かって活動し続ける予定である。

（文責：クリスチャン・ラットクリフ）

ヒト身体の文化的起源

1. 講演会・研究会の開催：

① 2012 年 7 月 10 日，藤田善也「スポーツ科学を用いた競技現場へのアプローチ」

② 2013 年 3 月（予定）

2. シンポジウムの開催計画：2013 年 3 月 22 日にマルチスケール骨格筋収縮動態に関する国際シンポジウムを開催予定

3. 活動内容

① 人間の身体を系統的に遡り，その根源を考察することで，身体が持つ機能的な意義を検討した。特に関節運動を増幅するアキレス腱の屈曲点について調査・研究を進めた。研究内容は 2013 年 7 月の国際学会にて発表する予定である。

（衣笠竜太）